奈文研での30年

奈良の記憶は、小学生の頃、幾度となく父母に連れられて訪れた平城宮大極殿の土壇や周囲の田んぼで、瓦の破片を拾い集めたこと、飛鳥寺や石舞台等、不便なバスを待って巡ったこと等様々だ。高校生の頃、進路をきめるのに、いくつもの夢の中、一つあきらめ、またあきらめしているうち、考古学しか残らなくなった。関西では面白くないので、わざわざ入学した東北大学では、旧石器研究が主流で、最初、前期旧石器を志したが、辛くも逃れ、捏造事件の外に留まることができた。たまたま発掘に参加した縄文貝塚で、貝殻と共に出土するシカやイノシシの骨を見た時、縄文時代の食料残滓（ざんし）、つまり遺跡の生ゴミの研究から、社会全体を復元しようと閃き、そのまま一生のテーマとなった。

しかし、日本の考古学は文学部に属し、動物骨について基礎から学ぶことができず、米国に留学して学んだ。学生時代は、石器時代の貝塚にしか興味がなかったので、自分自身、奈良文化財研究所に就職することになるとは、その直前まで予想もしていなかった。人生万事塞翁が馬、とはよくいったもので、東北大学在籍が10年を迎えようとした頃、奈文研の埋蔵文化財センター研究指導部長だった佐原真さんに誘われて奈文研を受験し、幸い合格することができた。

奈文研に来てからは、2年間、平城宮の発掘を手伝っただけで埋蔵文化財センターに移り、そこで専ら動物考古学・環境考古学の研究に専念させてもらった。奈良に来ると縄文貝塚ははるかに遠く、見るのは牛馬の骨ばかり。佐倉市の大作古墳群から馬具を装着した馬が出土した際、大化の薄葬令（はくそうれい）で禁止された、亡き人の馬の殉殺だったことをあきらかにできた。大阪府城山遺跡の奈良時代の溝から出土した馬の解体痕と、脳髄の摘出痕から、養老厩牧令（ようろうくもくりょう）の官馬牛が死なば、「皮脳角胆」を収めよ、という記載と合致し、延喜式の鹿皮を鞣（なめ）す際に脳を和えとする記述から脳漿鞣（のうしょうなめ）しに思い至り、慶州でも類例を見つけた。奈文研にいたお陰で、その後も粟津湖底遺跡、原の辻遺跡、真脇遺跡、東名遺跡等、数々の重要遺跡の発掘にかかわり、自分自身の研究法を実践できたことは、研究者冥利に尽きると感謝している。

（埋蔵文化財センター長　松井 章）